中友会

［発行所］
中　友　会
港区西新橋1-22-13
全日本中学校長会館202号室
東京都中学校長会事務局内
TEL　03-3504-8705
FAX　03-3504-8706

会則第２条
☯親　　睦
☯互　　助
☯生涯学習

https://chuyu-kai.org/index.html

# レッテルと援助

中友会会長　草野　一紀

もう半世紀も前のことである。私がまだ教員だった頃、中間テストや期末テストが終わり、採点した答案を生徒に返すと必ず、「先生、平均点は何点ですか？」と、質問があった。自分の点数が平均より上か下かが気になる生徒が多かったように思う。新米教師の私はそれを、ごく普通のこととして受け止めていた。

テストは学習活動の成果（習熟度や理解度）を評価するものであり、生徒一人一人の習熟度を測定し、それを生徒一人一人の学習の改善につなげるために行うものであり、同時に教師自身の指導の反省材料とするものである。だから、生徒がテストの点数に一喜一憂するのは意味の無いことであり、自身の理解度が足りなかった理由に気付くように、生徒を導くのが教師の役割である事を理解したのは、ずっと後のことである。

学習は点取り競争ではない。他人に負けないように努力するのは悪いことではないが、他人と比べてどうなのか、ではなく、自分の学習でどんな成果があったのか、また何が課題なのかに気付くことが大切なのだと思う。他と比べるのが好きなのは、日本人の特性なのだろうか。日本の生徒に自己肯定感が乏しいのはこのことと無関係ではないように思う。

さて、8月1日の新聞に本年4月に文部科学省が実施した「全国学力・学習状況調査」の結果が掲載された。とりわけ、中3対象の英語で「話す」技能の正答率が12.4％で、前問不正解が全体の6割を超えることがクローズアップされていた。課題が明確になったことにより、今後指導の改善が求められることになろう。また、読書量の多い児童・生徒は国語力のみならず、算数（数学）の力も良い結果が出ている。こうした分析は、「全国的な児童・生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。」「学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。」という調査の目的に合致するものである。

しかし、毎回疑問に思うことがある。それは、全国の公立学校の都道府県別の平均正答率（平均点）が順位付きの一覧表で掲載されていることである。

文部科学省は都道府県別のデーターは公表しているが、このような形では発表していない。順位を付けたのは各新聞社の判断だと思う。「石川県が小学校の国語、算数で一位」とか「英語は東京が一位」はこの調査の目的を考えれば意味のないことである。順位を付けることで調査本来の目的が歪められることがあってはならないと思う。

テストは評価方法の一つである。教育に関わる重要な評価に、テストも含めた「学習評価」それに「人事考課」、「学校評価」の3つがある。人事考課の主たる目的は教員の能力開発であり、学校評価は学校運営の改善・充実のために行うものである。すなわち、教育における評価は、評価対象者の向上を目的とするものであり、その柱は自己評価であり、それが適正になされるよう、周囲からの指導や助言がなされることになる。周囲からの評価は決してレッテルであってはならない。レッテルは決して向上にはつながらない。評価とは援助活動なのである。しかし、いずれの評価でも、そのように考えている方はあまり多くないのではないか。人事考課を好ましく思っていない教員は多いし、学校評価も外部からの評価が気になっている学校は多いと思う。なぜなら、その結果でレッテルを貼られる心配があるからではないか。

テストも含め、評価の意義が、教育者のみならず保護者・地域社会、そして行政からも正しく理解されれば、学校の負担は軽減され、「チーム学校」の活動は、これまで以上に輝きを増すと私は信じている。

改めて、大きな改革の中で苦労されている学校にエールを送りたい。これは会員共通の思いでもある。もし、私たちに何かできることがあれば、遠慮なく声をかけていただければと願うこの頃である。